

巻頭言

日立財団 Web マガジン「みらい」編集主幹
拓殖大学 政経学部
教授（犯罪学・刑事法専攻）

守山 正

Web マガジン『みらい』は第 2 号を刊行した。その特集として、今回は「親子関係の解剖学～その闇に迫る」と題して家族関係の問題点を取り上げた。執筆陣の専門分野も脳科学、心理学、精神医学、犯罪学と幅広く、親子関係を多角的、学際的に考察する試みである。これらの論稿の中で共通するキーワードは、「愛着」という言葉であろう。そこで示されているように、健全な親子関係を維持するのに、この愛着という要素がいかに重要であるのかが改めて思い知らされる。それも決して人間社会だけではなく、動物世界でもみられる現象であるという。私の犯罪学の世界でも、この親子間の「愛着」が非行防止の機能を有するという実証研究がみられる。アメリカの犯罪学者トラビス・ハーシは 10 代の多感な時期に非行に陥ることなく健全に思春期を過ごした少年たちと非行少年とを比較調査して、非行に陥らなかった少年たちに共通するのは親や教師との間に「愛着」を含む絆 (bond) がみられたことが要因であり、非行少年にはこの愛着が欠落していたと指摘している。したがって、非行を防止するには家族や社会との「愛着」が重要であると結論づけている。しかし、家族の間でこの「愛着」関係を維持するのはそうたやすいことではない。本特集の中にもあるように、家族関係の断絶や接触の少なさから愛着障害に陥ったケース、愛着障害に苦しむ子どもや大人の姿が描かれているし、逆に親の過度な子に対する期待は毒親とまで呼ばれる状態に至ると指摘される。

本特集はこのように「愛着」を基盤とする親子関係にメスを入れ、現代の親子関係のあり方を問うものである。わが国の親子関係を規定する文化的背景として、家族主義 (familialism) がある。しかし、近年、その家族主義が思わぬ方向に向かい始めているようにも思える。もっとも家族主義という言葉は多岐に使用され、使い方によっては「組織における支配と服従の関係を、家父長の恩情と子の家父長への奉仕の関係とみなす思想」などという意味もあり、安易に使用することは許されないが、通常の意味では「家族を何よりも大事にし、互いに助け合うことを重視する考え方」とでもいえばよいであろう。そして、その家族主義の中核には親子や兄弟の愛情、愛着、絆があるように思われる。家族を慈しみ、いたわり、困ったり悩んでいれば家族みんなで助け合う。まさしく愛着、愛情、絆が顕在化する場面である。

私が感じるところでは、先に述べたように、現代社会において家族主義の基盤である家族間の愛着や愛情が悪用され、あるいは予期せぬ方向に向かっており、その典型が「おれおれ詐欺」という社会現象である。「おれおれ詐欺」は欧米にはほとんどみられないわが国固有と言ってもよい犯罪現象である。この種の特殊詐欺は、よく知られるように依然として、年間数百億円という多大な

論文特集「親子関係の解剖学～その闇に迫る」

被害額を生み出している。考えてみると、「おれおれ詐欺」が生じるのは、まさに家族同士の絆が強いからであり、子や孫が深刻なトラブルに直面しているのを見ておられずに多額の出費をしても何とか助けたいという親心、祖父母の心の現れである。まさしく犯人は、わが社会で家族がトラブルを抱える場面では互いに助け合うという心情をよく理解しており、わが国の美風とされる家族愛、相互扶助の精神を悪用している。

もう一点、犯罪学の視点から「愛着」を考える契機が感じられるのは、世間では有名事件とされる少年の凶悪事件の背景である。通常、犯罪は複雑な原因で発生し、そう単純に原因はこれだと断定することは困難である。この状況は犯罪原因を探求する犯罪学者を苦しめており、欧米では中には犯罪原因を探求することの無意味さを示唆する論調すらみられる。しかし、私見では、一部の少年による凶悪事件の背景に、「愛着」を感じていた家族を突如失った直後に犯行に至る事例が散見される。たとえば、4人の幼女を誘拐殺害した宮崎勤事件、同様に小学生を数名死傷させた神戸酒鬼薔薇事件などは直前に最も愛着を感じていた家族を失っている。彼らは幼少期、家族から叱られるたびに同居していた祖父母の元に行って慰められ、安堵感を感じていたという。その祖父母が亡くなった喪失感が彼らを事件に向かわせたようにも思われるのである。

考えてみれば、愛着は 'attachment' という英語の語感からも分かるように文字通り、人間的な接触、接着や「くっつき」を示しており、人間の日常的な「くっつき」が家族関係の維持に重要であることは明らかである。それでは、現代社会において、「愛着」「くっつき」をどのように維持すべきなのか。一方で、家庭崩壊や離婚、別居といった家族の複雑化が進み、家族間の物理的な接触時間が減少する傾向がみられ、他方でITやAIが日常生活にまで浸透した時代に突入し、人間的接触を伴わない会話やコミュニケーションが可能になった現代では、本特集の論者が指摘するように、むしろ「愛着」を阻害する状況が広がりつつあるのではないか。そこで、こういった困難な状況において、いまいちど親子間の愛着とは何かと問い直し、この特集で示された知見を参考に、家族同士でじっくり話し合うのも有意義であるように思われる。